69　大年の客

あるお正月の夜にね、これ本当かうそか、これはわからんけどもよ、お爺さんから聞いた話だからよ。大晦日の晩に、一人のみすぼらしい人が、このある一軒の金持ちの家に入って来たってよ。ほんで、

「すみませんけれども、一夜は泊めて下さい」ってお願いしたって、そこに。そいてお願いしたらね、その家主がね、

「お正月にこないして人の家に宿を求めて来るのはね、どんな人か知れない」と、とにかくもう追い払ったわけよ。人を泊まらせるわけにはいかないといって追い払ったって、この金持ちの家から。

そしたら、このみすぼらしい支度をしたお爺さんはね、また隣の貧乏な家に、

「泊めてくれ」と言って行ったら、そこはまたね、そこの家は、何も食べるものはなくてね、薪を焚いて。冬さ、お正月の、大晦日は。

「薪を焚いて当たっても、お爺さんとお婆さんの二人でお正月しようねって、今相談しているところですから、それでもよかったら泊まって下さい」と言われたって。そしたらね、

「結構です」と言ってそのお爺さんが入ってきて。

そして、何か、このお爺さんがお米持たしてくれたといったのかね。何かそんな。そして明日、泊めてくれたお礼にね、

「あんたたちは欲しいものがあったら何でも言ってごらんなさい。欲しいものを出してあげるから」とおっしゃったらしいよ。そしたら、

「欲しいものはいりませんがね、もう年取ってお爺さんお婆さんだから、若返りたい」って言ったって。そのお爺さんお婆さんが。そしてあの、

「じゃあ、若返るんやったら」。お鍋にお湯を沸かしてね、お爺さんがお風呂入らせて浴びせたら、もう若者になってしまってね、このお爺さんお婆さんは。貧乏者のお爺さんお婆さんは。そして、若者になってしまって。それで、若くなったらね、お爺さんの、泊まりにきた、みすぼらしい支度をなさった人が神様だったってよ。

そして、その方がね、

「明日は、朝は隣の家に行きなさい」っておっしゃったって。そのおっしゃる通りに隣の家に行ったら、びっくりしてね、

「なぜあんたたちは昨日まで年寄りだったのに、今日はこうして若者になったの」と聞かれてね。それから、夕べのことを、

「泊まりにお爺さんがいらっしゃって、そして、泊まられたお礼にこうしてお風呂入ったら、もう若くなったよ」というように話したらしいよね。

そうしたら、自分の家に一応来たけれども、追い返されたでしょう、金持ちからは。そんでまた、後追ってまた呼び戻しに行ったらしいよ、この金持ちは。そして、泊まったら、

「私たちも若返りたいから、若くして下さい」ってまたその人にお願いしてね。したら、とにかく、そこの家の長男はお猿になったって。お猿になって。また、鳥になって飛んで行くものもあるし、みんなもう、鶏なんか、獣なんかになったんですよ。お爺さんたちも

昔の話を、聞いた話をまた孫たちにしたはずよ、その話はね。

そしたら、

「何か障りごとはないか」。障りごというよりも、その、もうこっちはみんな、鳥や獣になってみんな飛んでいなくなって、この金持ちの家は空いたさあね。だから、「そこの家はあんたたち夫婦で住みなさい」って。そこにこの貧乏者は住んだらしいよ。住んだらね、何かこの後から、

「何か災いごとはないか」ってまた回って、また神様はいらっしゃったって。その時に、何か、

「ワーヤーネーリー」と言ってお猿が来て、いつもこっちに、石の上に座って「ワーヤーネーリーしますよ」と言ったらね、そのワーヤーネーリーという言葉は、『私の家を返せ』という。私の家をネーリーという言葉で言ったらしいよ。そしたら、この神様がね、

「何時頃、夜は来るねえ」と言って、したら、

「何時何時に来ますよ」と言うたら、

「じゃ、あれが来る前にね、この黒砥石をね、火でものすごい焼いて置きなさい」っておっしゃったって。

そしたらね、お猿さんが来るさね。で、こっちに止まったら、それから焼けて、お猿はお尻が赤くなったってよっという話。もうそれからこっちには行かれないと。お猿も来なくなるしね、その貧乏者の正直な夫婦はこの家の主になって。神様が下さったって。

だから何でも、欲張りにもならないで、みんな素直に育てなさいよと言ったお爺さんのお話だったはずよ。

字小波蔵　伊敷フヂ子

類話

字糸満　稲嶺盛亀